

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	華字婦人雑誌『女声』における編集者関露のフェミニズム思想と植民地主義へのスタンス
Author(s)	谷, 雲星
Citation	HABITUS , 28 : 148 - 167
Issue Date	2024-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/55072
URL	https://doi.org/10.15027/55072
Right	
Relation	



華字婦人雑誌『女声』における編集者関露のフェミニズム思想と植民地主義へのスタンス

谷 雲 星

(広島大学人間社会科学研究科博士後期課程)

はじめに

1941年12月8日のアジア太平洋戦争の勃発は、中国上海において日本軍による共同租界（複数の国が半植民地的な支配下にある地域で住民から租税を徴収するところ）地への進駐、または上海全面占領として始まった。1941年12月から1945年8月まで、汪兆銘南京政府は占領区の世論を封じ込め、新聞や報道を統制し、文化や思想のコントロールを強化した。同時に、日本政府は中国の民衆に「親善外交」を強調するために、様々な「プロパガンダ雑誌」の発行を奨励した。それを背景として、婦人雑誌『女声』が刊行された。『女声』の編集長は日本人の田村俊子(女性作家)、編集者は中国人の関露などがいる。関露は1942年春、日本人共産党員である中西功¹⁾の紹介を通じて共産党地下工作員として『女声』の編集者になった。伝記『関露伝』によると、関露の任務は、「田村俊子の左翼の友人を通して日本の共産党地下工作員を探し、日本の軍事情報を得る」²⁾ことであった。本稿では、共産党のスパイである関露は、どのようにフェミニズム思想を論じながら植民地主義に対抗したかを検討する。

その他、関露は詩人として活躍していたが、女声社に入った後、『女声』に掲載された110篇以上の作品の中で、一篇も詩歌を發表しなかった。拙稿³⁾で分析したように、その原因は関露の詩観と関連すると考えられる。特に、関露は「『女声』編集者時代」に作った唯一の詩歌である「呉歌」⁴⁾を、『雑誌』⁵⁾という雑誌に投稿した。この詩歌を通じて、関露はどのような思想を伝えたの

か、その内容について考察する。

また、1945年4月に田村俊子が脳溢血により亡くなった後、関露は『女声』の編集長となり、『女声』第4巻第1期と第2期を発行した。『女声』第4巻と田村俊子が主宰した『女声』(第1巻第1期～第3巻第12期)を比較すると、雑誌の性格が大きく変化したことが確認される。したがって、関露が主宰した『女声』において、どのような変化と狙いが見られるのかについて検討する。

関露に関する伝記以外の研究は既に相当数存在している。中国の研究者たちは、具体的な文章から関露の女性意識を探究した。例えば、王茜妮(2011)⁶⁾は「評論」欄、戯曲、社会問題に関する言論を分析し、関露の執筆の特徴を考察した。唐芸多(2013)⁷⁾は「評論」欄で発表された関露の文章を対象とし、関露の重要なフェミニズム思想(古い観念への批判、男女平等、「新しい女」の責任など)を分析した。また劉人鋒(2014)⁸⁾は封建社会、現実社会への批判と女性自身の反省という三つの面から、関露のフェミニズム思想を詳しく考察した。高翔宇(2018)⁹⁾は関露の経歴と重要な活動(例えば、関露は『女声』の代表者として第二回大東亜文学者大会に参加した)に注目し、民族解放と性別解放の関係を浮き彫りにした。ただし、これらの研究では、『女声』で掲載された関露の作品における戦争に関する思想には触れられていない。

一方、日本の研究者たちは、前山加奈子(1991)¹⁰⁾が『女声』と関露との関連を考察し、関露の早期の活動や経歴を取り上げ、『女声』における具体的な言論を分析した結果、「主義を掲げたスローガンではなく、広く女性の現実生活と向かうべく方向を示した、いわゆるフェミニズム思想が見出されるのである」と結論付けた。前山氏は関露の戦争に関する文章に一部触れたが、関露の詩歌と編集長になった関露の狙いなどには触れていない。他にも、岸陽子(1996)¹¹⁾は関露の前半生の経歴と大東亜文学者大会に出席した時の内容を紹介し、呉佩珍(2003)¹²⁾は、『女声』時代における田村俊子の思想を明らかにし、田村俊子と関露との連帯関係を考察した。

以上から、本稿では関露による戦争に関する言論、詩歌「呉歌」、そして『女声』第4巻の変化から、関露の植民地主義へのスタンスを考察する。さらに、フェミニズム思想と戦争の関係についても明らかにしていく。

1. 関露の「グレーゾーン」的な態度—植民地主義へのスタンス

*Fu, Poshek*¹³⁾によれば、戦時下上海において、一般的な知識人たちは「無抵抗、抵抗、協力」¹⁴⁾という三つの選択肢から一つを選び、占領区で「グレーゾーン」的な生き方をせざるを得なかった。そして、関露のような地下工作員の知識人たちは、表面的には「協力」的な態度を示していたが、実際には「抵抗」しており、普通の知識人よりも複雑な状況で生きていたと考えられる。言い換えれば、彼女らの「グレーゾーン」的な生き方は、「抵抗」と「協力」を結びつけ、自らの真意を密かに伝えていたと言えるだろう。本節では、関露が『女声』で発表した「真意を覆い隠す」作品と彼女の詩歌「呉歌」を中心に据え、関露の「グレーゾーン」的な態度を明らかにする。

1.1 『女声』で掲載された作品

まず、関露が発表した女性と戦争に関する重要な作品を表1にまとめた。

表1 関露が発表した戦争に関する重要な文章（合計8篇）

掲載 巻一 号	欄 名	ペン ネー ム	作品名（括 弧の中は中 国語）	具体的な言論	要素
1-9	評 論	芳君	「トルスト イの宗教芸 術と婦女」	ここで、トルストイが称賛した真理と愛のために死んだ婦女たちを謳っている。今の時期には「愛」と「真理」を勝	犠 牲 の 意 味

			(「托爾斯泰宗教藝術與婦女」)	ち取るために、身を犠牲にする覚悟があるべきだ。	
2-1	評論	芳君	「職業婦人と無職業婦人」 (「職業婦女與無職業婦女」)	例えば、私たちは中国人であろう。「中国」が存在する際、国家を捨て置き、享楽にふけてもかまわない。しかし、「中国」がなくなると、私たちの「快樂」はすぐ潰れるかもしれない。	「国家」の重要性
2-4	收回租界特輯	芳君	「租界の取返しと上海の婦人」 (「收回租界與上海婦女」)	中国は礼儀を重んじる国である。中国人は自由、平和が好き、友達が好き、友好的な方法で他の国家と貿易するのも好きだ。しかし、白人は中国のことを知らず、特に英米(帝国主義)、彼らは中国の親善外交を利用して侵略した。彼らは中国の領地から租界を作った。上海の公共租界に英米帝国主義による罪悪と恥辱が溢れているだろう！ 彼らは軍事と経済の方面から私たちに侵略したのに限らず、文化的にも侵略している。彼らは租界に住んでいる私たちの思想を抑圧し、言論を監視し、自由言論に関する雑誌や書籍をすべて禁止する。	侵略、戦争
2-7	評	芳君	「冬から考	華北において大量の難民がいる。どこ	災難

	論		えたこと」 （「從冬天 想的事」）	もかしこもいる。彼らは町で横になっ ており、もうすぐ餓死する。	
3-5	評 論	芳君	「私たちは 強くなる う」 （「我們要 強壯起來」）	戦争による困難な生活を送っているた め、中国の婦女たちは仕事に勤しむこ と、時間を無駄にしないことが身につ いた。 婦女たちには、この「偉大な時代」から 体得した良い経歴を忘れないでほし い。学んだ良い習慣を永遠に守ってほ しい。	戦争
3-5	評 論	芳君	「非常時の 婦女」 （「非常時 期的婦孺」）	最近物価上昇し、米も少なくなったが、 それは私たちにとって全く驚かないこ とだ。 特に、最近電力の節約のため、電気の供 給が少なくなり、電車の便数も少なくな った。人たちは「万里の長城」のよう な長さの列を作っている。皆が整列の ルールを守らない際、電車から押しの けられた人は常に婦女と子どもであ る。	苦し い生 活
3-8	評 論	芳君	「新年から 考えたこ と」 （「從新年	事変が起きた後、数多くの婦女たちは 強固で忍耐強い。戦争がもたらした苦 しい生活において、人たちはお金がな くて飢えているが、たまに本を買って	苦し い生 活

			想定的)」	基本的な知識を求める。	
4-2	無	煥雲	「平和の声 における婦 人代表大 会」 （「和平声 中的婦女代 表大會」）	ヨーロッパ大戦が終わったが、この五 年間に無数の命はなくなった。 西洋の戦争の火はすでに消えたが、東 洋の火はまだ燃えている。孤独の婦女、 若い寡婦、町で飢えている孤児、死んだ 英雄の人数が増えないように、早く平 和が来てほしい。	戦 争 へ の 批判

表 1 に示されている通り、関露は女性問題を取り上げつつも、戦争や帝国主義についても論じている。例えば、「租界の取返しと上海の婦人」¹⁵⁾において、関露は表面的には英米の侵略を非難しているが、実際には全ての帝国主義（日本も含めている）を批判していると解釈できる。「冬から考えたこと」¹⁶⁾においては、災難（戦争）のため、大量の難民が家を失い、餓死した惨状を示している。「私たちは強くなろう」¹⁷⁾においては、「この偉大な時代からもらった良い教訓と良い経歴」のような言葉があるが、これは表面的には戦争を肯定するような内容に見えるが、実際には戦争を風刺していると言える。また、「非常時の婦女」¹⁸⁾の中では、物価上昇、食糧難、電力の供給不足などの現実問題が提示された。こうした問題の原因はまさしく戦争に起因している。関露がみずから表明しているわけではないが、関露の著作にくまなく目を通すと、女性問題や戦争、帝国主義など、彼女の問題意識、関心の一端をつかむことができるだろう。

一方で、関露は「租界の取返しと上海の婦人」¹⁹⁾において、帝国主義を批判したが、文章の後ろ、「友邦日本は『親善外交』と中国の『平等と独立』を守るために、先月の30日に公共租界の取返しの協約を締結した」「それは日中基本

条約を締結した後の最大の進展」と述べた。「帝国主義を批判する」と「日本に感謝する」は表面的には矛盾しているように見えるが、関露が自身の「協力」の立場を表明するためには、これらの言葉を言わざるを得なかったと考えられる。

1.2 唯一の詩歌—「呉歌」

関露は『女声』の編集者になった後、1944年3月に『雑誌』に詩歌「呉歌」を投稿した。これは『女声』編集者時代の関露が発表した唯一の詩歌である。先行研究ではあまり扱われていないが、実際には「呉歌」は早期の詩歌と大いに異なる存在として、関露の重要な作品の一つとされている。では、この詩歌において、どのような思想が伝えられているのだろうか。まず、詩の内容を確認したい。

呉歌 関露 『雑誌』第12巻第6期

1944年2月21日完成、1944年3月10日発表

宝剣、堅い刃、城堡、呉王の遺跡、
青草、美人、湖水、英雄の逸事。
闘いが無ければ、新生と自由がない、
恋が無ければ、人間の史詩もない。

ある春の日に、氷が既に溶けた、北風も弱めた。
私は古めかしい呉城に来て、岩と流水の話—古人の物語を聴いている。

古人の物語について、岩と流水は話した。
彼らは、恋と闘い、血の痕跡と臙脂(筆者注：女を指す)について話した。

彼らは教えてくれた：

昔々ある人の名前は夫差、彼は呉国の君主、
彼は隣国を征服したことがあり、彼は強くて戦争が好きだ。

彼らはこう言った：

夫差は風采がしょうしゃな公子だった。
彼はドン・ファン(Don Juan)のような風采があり、宋玉のような才能がある。
少年の彼はすでに騎射を習得した、為政を習得した、武闘と諷詠を習得した。

彼の目は朝日のように明るい、彼の唇は宝石のように赤くて艶やかだ。
彼の剣法はスペインの騎士より上手い、彼の詩歌はダンテとホメロスより優れる。

たまに彼は弱い書生のふりをするのが好きだが、強い騎士の服を着るのも好きだ。
昼間、彼は騎士だが、夜に彼は書生になる。
書生になるとき、彼は温和かつしおらしい；騎士になるとき、彼は英俊かつ逞しい。
詩歌を朗詠するとき、彼の声は春の泉のような快音であり、
馬に乗っているとき、彼はギリシャの彫像のようなものだ。

彼は箱入り娘のことを知っており、
彼女らの愉悦、恨み、怒り、憂いなどを知っている。
彼は細い草のようにやさしい声で、彼女らの秋の怨みと春の愁いを宥める。
さらに、彼は夕陽のような美しい詩歌を用いて、彼女らの気持ちを詠じる。

それは古い歴史上の、少年の呉王。

夫差は、成長している少年の時に、すでに兵法について熟知した。

彼は、「大義に準じて君主を滅ぼす」のために、

以前湯王（天乙、古代中国の殷王朝の初代王）が夏桀を滅ぼしたことがあり、

その後、牧野の闘いがあったことを知っている。

さらに、雄々しくて、特に優れており、復讐の思想を持っているため、

彼は覇者になりたがっていた。

彼はこの世界に専制的な覇者がいると信じていた。

彼は「征服」を用いて「城下の盟」を取る。

その後、夫差は君子から戦士になって、戦士から戦勝国の君主になった。

呉王夫差は兵士を呼び集め、彼らに兵法と剣法を教え、

自分の剛健、武勇と俊敏を教えた。

すると、諸侯たちは呉王夫差のことを知り、

夫差の軍隊の噂だけを聞いてもすぐ逃げ出す！

さらに越国の勾踐も夫差に征服された！

夫差は強国の君主になっても、風流を好む。

彼は兵士、戦争が好きだが、美人も好きだ。

だから戦勝したあと彼の宮に、越国の女—西施が入った。

夫差は完全な勝利を得て、自分の宮に安住している。

彼は強大な呉国を愛し、彼の軍馬を愛し、彼に服従している軍隊を愛し、

彼のリリカルな詩を愛し、彼の後宮の女を愛しているが、

西施の美貌を最も愛している。

されば、閱兵した後、朝礼の後、宮で西施は歌って踊りながら、呉王は詩を詠んでいる。

そしてようやく、呉王の宮殿で、湯のみの中で、嵐を起こした！

宮での歌舞を停止された。

勾踐は復讐の兵を挙げて、呉国の強敵になった。

なぜなら、越国の女はすべて西施ではなく、勾踐も自由が好きだから！

ある春の日に、氷が既に溶けた、北風も弱めた。

私は古めかしい呉城に来て、岩と流水の話—古人の物語を聴いていた。

関露は「呉歌」で呉王夫差²⁰⁾と越王勾踐²¹⁾の典故に基づき、作品を構築した。「呉歌」において呉王夫差は、「強くて戦争が好き」であり、「隣国を征服したことがある」が、最終的には越国の勾踐に敗れたとされている。関露はこの典故を通じて、日本軍を「夫差」、中国を「一回失敗した越国」になぞらえ、自由が好きな勾踐のように、中国人は諦めずに最後まで日本軍との抵抗を続けるべきだと暗示していると言える。特に、歴史上の勾踐は敗戦後、極めて苦しい生活を送っていたことが知られている。

呉はすでに越を赦し、越王勾踐は帰国した。そこで、身を苦しめ心をいため、胆をかたわらにおき、坐臥するときには仰いで胆をなめ、飲食するときにも胆をなめた。(省略)

勾踐はみずから耕作し、夫人はみずから機を織り、食物には肉を加えず、衣服には色彩を重ねず、おのれの意見を屈して賢人にへりくだり、あつく賓客を待遇し、貧民を救恤し、死者を弔慰し、一般人民と労苦をともした。²²⁾

詩歌における苦しい生活は、戦時中の中国民衆たちの「食うや食わず」の生活と同様であると考えられる。関露は勾踐の物語を引用し、中国人たちに彼の「臥薪嘗胆」の精神を呼び起こし、勝利を得るまで努力しようと訴えた。関露の早期の詩歌と比較すれば、「呉歌」は非常に婉曲な表現が使用され、帝国主義への批判も直接的には書かれていない詩歌だが、じっくりと吟味すると彼女は真意を変わずに読者にメッセージを伝えていたことが見て取れる。身分に縛られた関露は愛国心を捨てずに植民地主義と密かに戦っていたのである。これは関露に限らず、当時の「特殊な任務を担った」知識人たちの「グレーゾーン」的な生き方と言えよう。

2. 「新しい『女声』」——関露の『女声』編集長時代

1945年4月、『女声』の編集長であった田村俊子が突然に脳溢血により死去したため、その後任として関露が『女声』の編集長に就任した。関露は新たな編集長となった後、1945年6月には「三周年記念特集」と「佐藤俊子(田村俊子)の記念特集」を含む『女声』第4巻第1期を発行した。その後、1945年7月には、『女声』第4巻第2期が発行され、翌月の15日(1945年8月15日)、日中戦争が終結したことから、『女声』も廃刊となった。『女声』第4巻はわずか2期しか発行されなかったが、編集長としての関露と田村俊子の間には鮮明な差異があった。その差異について、関露は『女声』第4巻第1期の「後書き」に記している。

佐さん(田村俊子)は生前このような意見を持っていた。第4巻第1期から『女声』を革新し、新しい『女声』を発行することであった。革新された『女声』において、今まで掲載された長編の文章を中止し、新しいものに替える。現在、私たちは故人の意見を尊敬し、古い連載ものをしばらく休載し、新しいものに替える。²³⁾

現在の我々は、「新しい『女声』」における変化が田村俊子の遺志か、関露自身の考えかを確認することはできない²⁴⁾。しかし「新しい『女声』」の顕在的な変化を確認することができる。関露はこれまでのすべての長編小説を休載するのみならず、コラムの名前、割付等もすべて改めた。例えば、第4巻第1期は前述の特集であり、田村俊子の記念文章が何篇か掲載され、これまで日本軍や大東亜共栄を宣伝していた「新聞」欄がなくなった。第4巻第2期では、その「新聞」欄が「展望台」に変更され、ドイツの戦敗のニュースや、中国政府のニュース等が掲載された。また、関露はこれまで掲載された日本の文学作品をすべて休載し、新しい外国作品を訳載した。ここで『女声』における掲載された外国翻訳作品を表2と表3にまとめた。

表2『女声』において掲載された外国翻訳作品1（第2巻第4期～第3巻第12期）

作者	作品名(原名)	翻訳者	掲載巻・期・掲載欄
アレクサンドル・プーシキン	バフチサライの泉	関露	2-4・文芸欄
小宮義孝	稲と螟虫	錫熹	2-7・文芸欄
高橋敬三	パラオ近海の動物		3-7～3-12・趣味叢談
豊島与志雄	銀の笛と金の毛皮	緑妮 (陳緑妮)	3-1～3-3・文芸欄、児童欄
	うどんと石		3-4・児童欄
	太一の靴は世界一		3-5・児童欄
	象のワンヤン		3-8、3-9、3-11、3-12・児童欄
宮沢賢治	注文の多い料理店		2-8・文芸欄
武者小路実篤	愛と死	荻崖	3-3～3-8・文芸欄

火野葦平	怪談宋公館		3-10～3-12・文芸欄
小泉 八雲	Beyond man	辛夕照	2-10・文芸欄
稲 垣	清おばあさん	霊陀	3-12・文芸欄

表 3 『女声』において掲載された外国翻訳作品 2（第 4 巻第 1 期と第 2 期）

作者	作品名（日本語訳）	翻訳者	掲載巻・期
江口近子	ばらばらになった子どもたち へ	煙袋	4-1
ワシレーフ スカヤ	虹	小光	4-1～4.2
アーマ・ダ ンカン	イザドラ・ダンカンの悲劇	林荫 (関露のペンネーム)	4.2
石井 漠	ダンカンと現代バレエ芸術	煙袋	4-2

表 2 と表 3 をまとめてみると、『女声』第 4 巻における翻訳作品数は少なかったが、日本の文学作品数が減少したことがわかった。田村俊子が編集した『女声』において、関露が訳した「バフチサライの泉」以外、全ての作品は日本人作家（あるいは日本の国籍をもつ作家）によるものであった。むろん、これらの作品のうち、七割以上は戦争とは関係なく、子ども向けの物語や、動物に関する知識などが紹介されたものであった。しかしそれらの作品からは、ある程度の日本政府による文化侵略への協力が読み取られるだろう。

一方、関露が編集した『女声』の中の、「ばらばらになった子どもたちへ」は母親から戦争に巻き込まれた子どもたちへの手紙であり、母親の母性愛を示している。「ダンカンと現代バレエ芸術」の作者石井漠²⁵⁾は日本人であるが、扱

っている内容はアメリカのダンサーイザドラ・ダンカン²⁶⁾であり、日本とは関わりがない。また、関露が訳した「イザドラ・ダンカンの悲劇」も女性ダンサーダンカンの経歴をめぐるものであった。特にここでは長編小説『虹』を取り上げたい。『虹』はポーランドの女性作家ワシレーフスカヤによる小説であり、女性の視点からドイツ軍の残酷さを告発し、戦争やファシズムを猛烈に批判した作品である。関露は『女声』にこの作品を載せる際、以下のように紹介している。

W・ワシレーフスカヤはポーランドの人気の女性作家である。彼女は今回のヨーロッパ大戦で身をもって残酷な戦争を見た。彼女は飢え、病気、血と死を見た。「虹」とは、残酷な戦争に踏みにじられたソ連で起こった物語である。

ワシレーフスカヤの執筆動機について、彼女は平和を訴えるかどうかはわからないが、客観的に言えば、アンリ・バルビュス²⁷⁾の『クラルテ』と同じように、戦争の酷さを告発する反戦作品といえるだろう。

現在、世界中の人たちは戦争がもたらした生活を飽きた。上海に住んでいる私たちは戦争の惨めを見たことがないが、その怖さが想像できるだろう。では、この女性作家の文字を通して戦争の実況を見よう！

去年に日本人作家はこの本を訳した。この本は「ロシア月刊」で連載され、その後東京で単行本として発行された。訳者は袋一平先生である。(編集者から)²⁸⁾

「編集者」(関露)は、作品(『虹』)が反ファシズム・反戦の性格をもつものであるが、日本語訳文が存在するため、中国においても訳して連載できると主張した。実際、『虹』の日本語訳文に関して、日本の訳者である袋一平²⁹⁾は、「検閲と雑誌のページを考えて、原作を約半分に縮め、半年連載の予定で苦心の仕事を進めた。第四回までどうやら済んだ。第五回分の印刷中に発売禁止の命が下り、私はつかまって、あと一息というところで挫折した」³⁰⁾と述べた。

ここからわかるように、『虹』の日本語訳文は当時日本で禁止されたことがあるが、関露は中国語の訳文を日本側の「プロパガンダ雑誌」で連載した。

なぜ『虹』は日本で禁止されたのか。袋一平は「この言葉（筆者注：『虹』における言葉）で、生々しい肉体と精神のすがたを描き出し、味方には不敗の信念を焼きつけるとともに、敵にはその心胆を縮みあがらせている」³¹⁾と指摘した。要するに、当時の日本はドイツの味方であり、「心胆を縮みあがらせる」対象であったため、『虹』の訳文を禁止したといえよう。一方で、中国語訳を掲載する関露の狙いは、おそらく中国人読者に「不敗の信念」を伝え、反戦・反ファシズムを訴えることであったと推測される。

おわりに

以上の考察から、関露のフェミニズム思想と植民地主義へのスタンス、フェミニズム思想と戦争の関係が明らかになった。植民者は、フェミニズムを利用して植民地の文化侵略を深める一方で、被植民者たちは、フェミニズムの翼下で、植民地主義への抵抗を相対的に安全に伝えられるだろう。これらの「抵抗」は常に一皮があり、直接的な政治や戦争の話 avoidance 家庭倫理、フェミニズム思想、ジェンダー論など、様々な方法を用いて「内密な抵抗」が行われていた。

Fu, Poshek は、「この時期に、数多くの文学作品は「隠されたテキスト」(hidden transcripts) とみられ、婉曲に『包み隠された思想的な抵抗』が伝えられる。そして恐怖と死に直面するときに、ある種の『ベールに包まれた批判』と認められる」³²⁾という仮説を述べている。Fu 氏の仮説から関露の作品を読めば、彼女の作品は「包み隠された思想的な抵抗」、「ベールに包まれた批判」の特徴に合致していることがさらに明確になった。

(※下線はすべて筆者によるものである。中国語、英語引用の訳文はすべて拙訳による。原文引用の際、旧字体は新字体に改めた。

註

- 1) 中西功(1910～1973)、日本の共産主義運動の活動家・中国問題の政治評論家。
- 2) 丁言昭『関露伝』上海文化出版社、2009年、p.93
- 3) 谷雲星「華字婦人雑誌『女声』における編集者関露の早期思想：1930年代における関露の女性に関する作品と詩集『太平洋上の歌声』を中心に」『倫理学研究(27)』、2021年9月30日
- 4) 関露「呉歌」『雑誌』第12巻第6期1944年3月
- 5) 『雑誌』は1938年5月に創刊され、反ファシズム、民族解放の文章が多かったため、1939年7月と1941年4月二回停刊された総合雑誌であった。1942年8月復刊され、1945年8月まで発行された。編集長は呉誠之(共産党地下工作員)。復刊された『雑誌』は表面的には政治の中立性を持つ文学雑誌だが、日本側に「協力」の立場を表明しながら、中国の読者に「反抗の呼びかけ」を密かに伝えていた。
- 6) 王茜妮「関露在『女声』中的言論研究」、遼寧大学修士論文、2011年
- 7) 唐芸多「戦争夾縫中的新女性」華東師範大学修士論文、2013年
- 8) 劉人鋒「論関露作品中的女性意識」『名作欣賞』29期、2014年10月 pp.26-30
- 9) 高翔宇「性別戦争與國家的変奏及書写——以関露為中心的考察」『婦女研究論叢』2018.9
- 10) 前山加奈子「雑誌『女声』と関露——フェミニズム的見地からの再評価」、『中国女性史研究』中国女性史研究会、1991年
- 11) 岸陽子「夜に啼く鳥--大東亜文学者大会と一人の中国女性作家」『人文論集』(35)、早稲田大学法学会、1996年
- 12) 呉佩珍「上海時代(1942—45)の佐藤(田村)俊子と中国女性作家関露:—中国語女性雑誌『女声』をめぐる」『比較文学』、日本比較文学会、2003年
- 13) Fu, Poshek、本名傅葆石。1955年香港に生まれ、後スタンフォード大学の歴史学博士号を取得した。現在はアメリカの国籍を持っている。
- 14) Fu, Poshek *Passivity, Resistance, and Collaboration :Intellectual Choices in Occupied Shanghai,1937-1945* Stanford University Press, 1993年11月; 原文は

“writers in occupied Shanghai conceived a triad of responses to the Occupation: passivity, resistance, and collaboration.”となる。

- 15) 芳君「收回租界與上海婦女」『女声』第2巻第4期
- 16) 芳君「從冬天想到的事」『女声』第2巻第7期
- 17) 芳君「我們要強壯起來」『女声』第3巻第5期
- 18) 芳君「非常時期的婦孺」『女声』第3巻第5期
- 19) 芳君「收回租界與上海婦女」『女声』第2巻第4期
- 20) 中国の春秋時代の呉の君主。
- 21) 中国の春秋時代の越の君主。
- 22) 『史記』(上) 司馬遷著 野口定男(ほか)訳、平凡社1968 p.463 越王勾踐世家(第十一)
- 23) 関露「編後記」『女声』第4巻第1期、1945年6月15日
- 24) 私見によれば、こうした変化は関露自身の考えによるものの可能性が高い。例えば、第3巻第12期に掲載し始めたばかりの稻垣「清おばあさん」は第4巻第1期で突然に休載され、一回しか掲載されていなかった。第4巻から『女声』を革新すれば、第3巻12期に新しい文章を掲載しないだろうから、これは田村俊子の考えとするのは不自然である。
- 25) 石井漠(1886-1962)、日本の舞踊家。
- 26) イザドラ・ダンカン(1877-1927)、アメリカの有名なダンサー。「モダンダンスの母」と呼ばれる。日中戦争中、中国に行ったことがあり、中国民衆の抗戦を支持した。
- 27) アンリ・バルビュス(1873-1935)、フランスの作家、ジャーナリスト、反ファシズム・反戦・平和運動家。代表作『地獄』、『砲火』等。
- 28) 関露『女声』第4巻第1期
- 29) 袋一平(1897-1971)、日本の翻訳家、ロシア語の和訳を専門とした。
- 30) 袋一平『虹』角川文庫1955年 p.307
- 31) 同上書、p.308
- 32) Fu, Poshek 『Passivity, Resistance, and Collaboration :Intellectual Choices in

Occupied Shanghai, 1937-1945』 Stanford University Press, 1993 年 11 月 ; 原文は「Thus my working assumption throughout this book is that many of the literary texts of this period should be read as “hidden transcripts,” mediated responses of “disguising ideological insubordination,” and a “veiled critique of power” expressed in the face of terror and death.」となる。

Editor GuanLu's Feminist Ideology and Stance on Colonialism in the Chinese Women's Magazine 'Women's Voice'

Gu Yunxing

The commencement of the Asia-Pacific War on December 8, 1941, in Shanghai, China, marked the invasion of the Japanese military into the International Settlement (an area where multiple countries collected taxes from residents) and the full occupation of Shanghai. From December 1941 to August 1945, the Wang Jingwei Nanjing government contained public opinion in the occupied areas, controlled newspapers and media, and further reinforced control over culture and ideology. To emphasize 'friendly diplomacy' to the Chinese populace, the Japanese government encouraged the publication of various 'propaganda magazines.' Against this backdrop, the women's magazine 'Women's Voice' was published. The editor-in-chief of 'Women's Voice' was Japanese, Toshiko Tamura, and the editor was Chinese, Guan Lu, among others.

In the spring of 1942, Guan Lu, introduced through Japanese Communist Party member, became an underground operative for the Communist Party and an editor for 'Women's Voice.' In this paper, we will examine how Guan Lu, a Communist Party spy, used feminist ideology to combat colonialism. Furthermore, while Guan Lu had been active as a poet, she did not publish a single poem among the more than 110 works featured in 'Women's Voice' after joining the Women's Voice Society. As analyzed in my previous paper,

this can be attributed to Guan Lu's poetic perspective. Particularly, during her time as a 'Women's Voice' editor, she submitted only one poem, 'Song of Wu,' to the magazine 'Zazhi.' Through this poem, what ideology did Guan Lu convey? Additionally, after Toshiko Tamura passed away from a cerebral hemorrhage in April 1945, Guan Lu became the editor-in-chief of 'Women's Voice' and issued the fourth volume's first and second editions. By comparing the fourth volume of 'Women's Voice' under Guan Lu's leadership with the earlier volumes managed by Toshiko Tamura, significant changes in the magazine's character become evident. Therefore, what changes and objectives can be identified in 'Women's Voice' under Guan Lu's direction? This paper aims to address these questions.